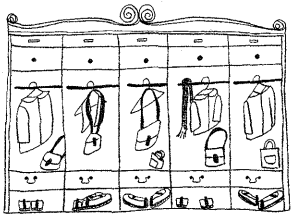
片づけから気づくこと

田中奈津子

幼稚園の一日の中には、いろいろな活動があります。その一つひとつの活動の間にあるのが、「片づけの時間」です。子どもたちは、「まだ遊びたい」「まだやりたい」という気持ちをもちながら、今まで楽しく遊んでいたもの、使っていたものを片づけ、次の活動に移る準備をしています。幼稚園の生活だけでなく、子どもたちが生活していく中で、いつもそばにある「片づけること」を、どのように身につけていったらよいのか、また幼稚園の教員として、幼稚園で子どもと一緒に「片づけること」の楽しさと難しさを、子どもたちの様子から考えていきたいと思います。



自分のものを片づける

「片づけること」の始まりは、自分のものを大切に思って、「自分のものを自分で片づける」というこ

とだと思います。幼稚園でも「自分のものを自分で片づける」という場面があります。私たちの幼稚園では、クレヨンやはさみなど個人持ちのものは、ロッカーの引き出しに片づけます。名前が書いてある定位置が決まっているので、子どもたちも自分のものとして、進んで片づけることができます。

お弁当は自分で出して、食べ終わったら自分で片づけます。幼稚園でお弁当を食べ始めた当初は、食べ終わっても、お弁当箱を出したまま遊び始めてしまう子がほとんどでした。「お弁当箱を片づけようね」と声をかけると、お弁当箱を、そのままかばんに突っ込んでしまっていました。しかし、「お母さんが入れてくれていたように、しまおうね」と言葉をかけながら、一つひとつの動作を一緒に繰り返すと、次第に一人ひとり、きちんと片づけができるようになりました。お弁当袋にお弁当箱を入れ、ランチョンマットを畳んでしまい、かばんをロッカーに片づけるということを、一つひとつを丁寧にすることによって、きちんと片づけることが自然とできるようになったり、ものを大切に扱う気持ちが、伝わるように感じます。

みんなのものを片づける

「自分のものを自分で片づけること」のほかに、幼稚園では、「みんなのものをみんなで片づける」場面があります。友達と、たくさんの遊具を使って遊び、一緒に片づけます。そのような時、子どもたちは、自分の片づけられる遊具の量をきちんとわかっているのではないか、と思うことがあります。

私が、率先してたくさんの遊具を使って、場づくりをしたことがありました。子どもたちも参加して遊びましたが、片づけになると、いつものように子

どもたちが片づけることができません。大人のように、先のことを考えて遊具を出すのではなく、遊びたいものを、遊びたいだけ出して遊べるのが子どもの遊びのおもしろさだと思います。これは後で述べる、「満足して片づける」とも関係すると思いますが、自分たちで出して楽しく遊んだものであれば、たくさんの遊具であっても、子どもたちの力で片づけることができると感じています。

片づけのタイミング

好きな遊びの中で、「使い終わったものは片づけて、次の遊びに移ってほしい」という思いがあります。しかし、子どもたちの遊びは、「こっちは終わったから、次はこれ」というように、はっきりと区別がついているわけではありません。「それもやっているけど、今はこれ」というように流れるようにつながっています。

そのような遊びの中で、「片づけましょう」と声をかけるタイミングの難しさをいつも感じています。「片づけること」を知らせる時には、「片づけて、お弁当にしよう」など、できるだけ次の活動も一緒に知らせるようにしています。

しかし、幼稚園では、「まだ遊びたい」「まだやりたい」という気持ちをもちながら、片づけなくてはならない場面が多くあります。そんな時、今までやっていた活動の続きを、翌日の楽しみにしながら、次の活動に移っていけるように、片づけをしたいと考えます。

五月の中旬、お医者さんごっこをして遊んでいました。ねこのぬいぐるみが、子どもたちの病院に入院していました。お医者さんになっているSくん、看護士さんのKちゃん、くすりやさんのRくんはそ

れぞれの役になりきって、マスクを作ったり、熱を測ったり、薬を飲ませたりして、ぬいぐるみのお世話をしていました。「お片づけをして、お弁当の時間にしよう」と言うと、「まだ遊びたい！」「まだねこさん治ってない！」という声が上がります。「どうしようか」とみんなで考え、ベッドを残して、寝かせてあげることになりました。近くには、薬と体温計も置きました。Kちゃんは、お弁当が終わった後に、そっとねこの様子を見に行ったり、お医者さんごっこに参加していなかった子どもたちも、ねこの頭をなでたりしていました。翌日にもお医者さんごっこは続き、前日に参加していなかった子どもたちも興味をもち始めたようでした。

「片づけること」が苦にならず、新しい遊びやかかわりのきっかけになるよう、「片づけのタイミングと片づけ方」を考えていきたいと思います。

満足して片づける

五月のお天気のよい日、子どもたちは砂場で泥んこ遊びをしたり、園庭に高速道路やおうちごっこの場をつくったりして遊んでいました。たくさん遊具を出して遊んだ後、お弁当の時間になり、みんなで片づけることになりました。園庭の遊具は種類別に分かれていて、四歳児にとっても片づけやすいものが多く、この日もすぐに片づけることができました。最後に、ぶらんこの近くにあったスコップ二つを見つけて、一目散に走っていった五歳のKくん。

私は、「Kくん。よくスコップ見つけたね。お片づけしてくれてありがとう」と声をかけました。すると、Kくんは少し困った顔をして、「遊ぼうと思って取りにきたんだけど」と言います。私は、「そうか。でも、もうお弁当だから、お片づけして

くれるとうれしいな」と言いました。しばらくして砂場を見ると、Kくんは、彼の言ったとおり、二つのスコップを使って、楽しそうに遊んでいました。園庭のほかの遊具も片づき、友達も保育室に入ってしまったころ、Kくんは、そっと二つのスコップを拾い、きちんと片づけて保育室に戻ってきました。

遊んで、満足すると、自分の気持ちから次の活動に移ることができます。幼稚園の集団生活の中であっても、保育者が、少し気持ちの余裕をもつことで、このように、子どもたちの気持ちの流れに沿って、生活していくことができていくと感じました。

片づけやすさ

子どもたちが、遊具を片づける様子を見ていると、一番片づけやすい遊具は、積み木のようです。入園したばかりの四歳児でも、一生懸命運んで片づけています。積み木の片づけには、決められた場所があること、形の種類が決まっていることといった片づけやすさがあります。また、積み木の片づけには、場をつくる場合のような、運んで積み上げるおもしろさもあります。そのおもしろさから、重い積み木でも、みんなで協力して運びます。そして、きれいに積み上げる、というパズルのようなおもしろさも発見していき、「片づける」ということも遊びの一つになっていきます。

一方、ままごとの道具は、細かいものが多く、子どもたちにとって、片づけにくいようです。以前は、大まかに種類別に箱に分け、棚にしまうという片づけ方をしていました。片づける場所がわかりづらく、「これ、どこ?」という言葉をよく耳にしていました。そこで、中の見えやすいかごのラックに、種類別の表示をして片づけるようにしました。

遊具がよく見え、出し入れがしやすくなったので、お皿やお弁当箱が、よくテーブルの上に登場するようになりました。また、子どもたちも片づける場所を迷うことなく、自分たちで片づけられるようになりました。片づけることが、苦にならずに取り組めるように、遊具の定位置を決めた環境構成になるように心がけています。

ロッカーの引き出しは宝箱

はじめに、「片づけること」の始まりは、自分のものを大切に思って、「自分のものを自分で片づける」ということと述べました。そのことを実感するのは、子どもたちのロッカーの中を見た時です。「いつのまにこんなに！」と思うほど、一人ひとりのロッカーの中には、ありとあらゆるたくさんの宝物が詰まっています。一生懸命作った動物のお面やペープサート、時にはお友達に取られたくないブロックの車や、お気に入りのぬいぐるみがお布団と一緒にたくさん入っていることもあります。入園してわずか二か月あまりの間に、誰にも言われなくても「大切に思っているものは自分の所にしまう」という気持ちが育っていることを、頼もしく思います。これからも、たくさんの宝物を詰め込めるような幼稚園生活になることを願い、時にはこっそり、子どもたちの宝物を見るのを楽しみにしたいと思います。

「片づけること」という子どもの活動の中には、子どもの気持ちに気づく場面が、多くあるようにも感じます。活動の合間で、つい慌しくなってしまう時間ではありますが、これからも丁寧にかかわっていきたいと思います。

（港区立麻布幼稚園）